

- 1 派遣期日 令和4年12月2日（金）
- 2 派遣先 神奈川県横浜国立大学教育学部附属鎌倉中学校
神奈川県鎌倉市雪ノ下3丁目5-10
<https://kamachu.ynu.ac.jp/>

3 研修内容

(1) 研究主題

「自立に向かいたくましく生きる」児童・生徒の育成
を目指す教育の充実

横浜国立大学教育学部附属鎌倉中学校では、2022年度小中研究主題として「自立に向かいたくましく生きる」児童・生徒の育成を目指す教育の充実、という主題で研究を進めている。今年度は10月に、小中合同研究発表会を開催したり、シンポジウムや公開授業などを積極的に行ったりと、教育の理論的・実践的研究を行うとともに、国や県教育委員会、市町村教育委員会及び地域の公立学校とも連携した教育研究を行うことを使命として教育活動に取り組んでいる。

(2) 当日の流れ

- ・授業参観（9：45～11：35）
 - 2時間目 9：45～10：35 1-4教室
歌・「昨日何をしたか」過去形を使った対話活動・リテリングなど
 - 3時間目 10：45～11：35 1-3教室
歌・「昨日何をしたか」過去形を使った対話活動・リテリング
grammarlyを使った英作文など
- ・研究協議（11：45～12：35）
今年度の英語科研究テーマの説明・授業の振り返り・質疑応答など

(3) 視察内容・学んだこと

①教材の工夫

授業で使うワークシートには、生徒が必要であろうヒントとなる単語や表現、また意識すべきポイントなど、どのレベルの生徒もその1枚を見れば活動できるように分かりやすくまとめられていた。また、授業の中で行うパフォーマンステストやライティング・リテリングテストでは、事前にそのテストの目的や採点方法など、ループリックとして示されており、生徒がどの力を身に付けるために何を頑張ればいいのかが明記されているため、生徒たちの学習意欲の向上につながると感じた。私自身も、テストを行う前にループリックで評価基準を示しているが、頻度としては学期に多くて2回程度だった。しかし鎌倉中学校では、毎單元ごとにパフォーマンステストやリテリングテストを行っていて、生徒が自分のできたところや改善点を知り、それを次回に生かす機会がとて多く、学力向上につながっていると学んだ。授業は週4コマで、3コマはJTEが、1コマはALTがメインで授業を行っています。ALTは主にスピーチやプレゼンテーションなどのパフォーマンステストを行い、その際JTEは週3コマの中でそれに向けた練習や補充的な学習を行うなど、ALTと密に連携を図って授業を行っている点も参考になった。

②ICTの効果的な活用

書く活動において、自分の書いた英文が正しいかどうかを確認することは、教師が正すこと以外難しいと考えていたが、生徒は、あるテーマについて、「grammarly」というソフトを使って英語で文章を作っていた。そのソフトは、自分の英文のどこが間違っているかを教えてくれるソフトで、正しい英文に直しながら文章を作ることができる、まさに個別

最適な学びを深められる活用だった。教師が一人一人回って生徒の英文を直すより効率的で、間違いに気づき、考え、その場ですぐに直せるところがこのソフトのメリットである。

また話す活動においては、モデル文（教科書の本文・自分の作った原稿等）をドキュメントの音声ツールを活用して吹き込み練習をしている。「grammarly」同様、正しい発音や音声であったかどうかを一目で判断できる。また間違った単語はネットで調べ、すぐに練習をして改善し、最後にもう一度吹き込みをして、個々の練習成果を見る。主に、単語・文法習得に関して構想→実践→評価→改善のサイクルを生徒自身が主体的に行っている。

③組織としての取り組み

【2022年度 教科研究テーマ】

心がふれあうコミュニケーション
～気づきから得た自己調整～

【教科で願う子供の姿】

- ・自分のことを詳しく知ってもらうために、相手意識をもちながらコミュニケーションを行う姿
- ・課題に対し、お互いの知識を共有し、よりよい表現や発表になるように試行錯誤する姿
- ・自分の学びを振り返り、改善点を見つけ、新たな試みをしていく姿

鎌倉中学校では、学校全体の研究テーマをうけて各教科でも研究テーマを設定している。それは、昨年度の反省から課題を見つけ、それに見合ったテーマを設定している。具体的には、昨年度英語科では、自己調整ができていないという生徒自身の評価や、自分なりの課題解決を見つけている生徒としない生徒の差が激しいという反省があがった。そこから、課題を見つけるには何かと比較して自分の現状を知ることが必要であり、気づきがないとそれを活かして調整しないのではないかと考え、今年度は「心がふれあうコミュニケーション～気づきから得た自己調整～」というテーマに決定した。英語科として共通のゴールを見据えながら、チームで指導をしている点や、小学校とも連携し、小学校段階での学習到達度や課題を踏まえ、中学校の指導に繋げている点なども含め、組織的に取り組んでいた。

（４）授業づくりの視点で参考になった取り組み

①「気づかせる場面」の意図的な設定

生徒は気づきの中から自分の会話や発表を再構築したり、個々のスキルアップにつなげたりして、構想→実践→評価→改善のサイクルを自分自身で行っていた。

②ワークシートのメモを活用した評価と指導への還元

４線ノートは使わず、ワークシートを導入している。生徒は余白に自分の伝えたい内容や授業で気になったことを書いたり、スピーチ原稿の再構築に使ったりしている。教師は生徒が何を考え、気づき、どう改善しているか、その変遷も評価している。

４ 感想

今回、先進校等調査派遣の機会をいただき、生徒の話したい、書きたい、知りたいという思いを大切にしながら、友達のいい点や自分の改善点など多くのことに気づき、それを自己調整して学力を高めているからこそ、さらに主体的に学ぶ姿勢が生まれるように感じた。

また、自分の授業や指導観を見つめ直す良い機会となった。生徒達が将来英語を使って何ができるようになるか、その理想の姿を頭に入れながら日々の指導に活かしていきたい。